外国人による婦女暴行デマとその背景

市　川　孝　一

The Rumor of "Rape by Foreigners" and its Social Background

Koichi Ichikawa

はじめに

外国人労働者の問題は、今や大きな社会問題になりつつある。1990年秋から冬にかけて埼玉県東南部や千葉県の一部に、"女性が外国人に次々に襲われ、乱暴された"というデマが広がった「事件」も、外国人労働者問題との関わりで人々の注目を集めた。本稿では、このデマについて実施したアンケート調査結果の一部を紹介し、デマの背後にある社会心理の一端を分析してみたい。

調査方法

1990年12月5～10日、埼玉県下にあるB大学の学生259名（男81名、女178名）を対象に下記のような簡単な調査を実施した。B大学は、このデマの舞台である埼玉県東南部の越谷市にある。

うわさについてのアンケート調査

Q．1 "(埼玉県東南部などで）女性が外国人に次々に襲われ、乱暴された"といううわさを聞いたことがありますか。

1．聞いたことがある（知っている）

(1)直接聞いた　いつ＿＿＿だれから＿＿＿

(2)ＴＶで見た　いつ＿＿＿

(3)ラジオで聞いた　いつ＿＿＿

(4)新聞で読んだ　いつ＿＿＿

(5)その他（具体的に）＿＿＿

2．聞いたことがない（知らない）

Q．2　あなたが聞いたうわさの内容を具体的に詳しく書いて下さい。また、このうわさに関連してあなた自身やあなたの身の回りに起こったことをあげて下さい。

Q．3　あなたはこのうわさについてどう思いますか。あなたの考えを自由に書いて下さい。

Q．4　あなたはこのうわさをだれかに話しましたか。

(1)話した　だれに＿＿＿いつ＿＿＿

(2)話さなかった

Q．5　あなたが現在住んでいるところはどこですか。

(1)＿＿＿＿＿＿＿＿

(2)自宅・自宅外

性別　男・女　　年齢（　　）才

結果

ここでは、各質問項目の回答の単純集計結果の一部を紹介する。

Q．1〔うわさへの接触〕

このうわさを「聞いたことがある（知っている）」と答えたものは、171名（66.0％）で、さすがに「地元」だけに高い数字を示している。しかもその中で、「直接聞いた」と答えた者も122名おり、うわさの浸透度の高さをうかがわせる（Q．1で1と答えた者、つまり「聞いたことがある（知っている）」の

71.3％に達する)。ちなみに、その他の回答は、「ＴＶで見た」23名、「ラジオで聴いた」５名、「新聞で読んだ」46名、「その他」５名である。次にうわさに接した時期だが、これを「直接聞いた」と答えた者について見てみよう。「直接聞いた」の122名中、119名が「いつ」「だれから」にも具体的に答えているが、多くの回答は11月に集中している—58名（48.7％)。以下12月—33名、10月—11名、９月—２名と続く。「夏休み」と答えた者も２名いる。性別で見ると、「聞いたことがある（知っている)」は、男49名（60.5％)、女122名（68.5％）で、女性の方が「接触率」（「認知率」）が高い。これはうわさの内容からいって、ある意味で当然の結果であろう。女性にとっての方が、「切実さ」がより強いデマであったことは容易に推測できる。

「だれから」に具体的に答えた119名について、うわさの入手先を見ると圧倒的多数は「友人（友達)」と答えている——67名（56.3％)。これに「先輩」という回答の11名を加えると、それは65.5％に達する。いかにも学生らしい回答としては「バイト先」というものが、15件含まれている。後で触れる、「だれにうわさを話したか」という、うわさの伝達先の回答と突き合わせてみると、大学生の人間関係のネットワークというのは意外に限定されたものであることが分かる。

Ｑ．４〔うわさの伝達〕

この場合も性差が出てくる。

	話した	話さなかった	ＮＡ
男	12	36	1
女	57	63	2

と、男女のいずれの場合も「話さなかった」が「話した」よりも数では上回るが、「話した」の場合の男女差を見ると性別が顕著に表われる。「話した」は、男の場合24.5％だが、女性の場合は、46.7％と高い。女性たちの方がうわさに敏感に反応し、より活動的な「伝え手」になったことがうかがわれるが、これまたうわさの内容からいって当然のことであろう。

うわさをだれかに話したという「伝え手」の69名について、その伝達の中身を見ておこう。うわさの伝達先の圧倒的多数は「友人（友達)」である—57名（82.6％)。「先輩」「後輩」を加えると85.5％になる。残りは「両親」「兄弟（姉妹)」など「家族」で、それ以外には「バイト先の女の子」という回答が一件あるだけである。

もう一つの「いつ」うわさを話したかという問いに対する回答が興味深い。「話しを聞いてすぐ」「うわさを聞いた直後」などの答えを含めて、「伝え手」たちの大多数は、あまり間を置かずにうわさの伝達役となっているのである。聞いてから伝えるまでのブランクが一か月以上あるのは３件のみである。もちろんデータだけから断定することは出来ないが、このデマの場合、“だれかに話さずにいられない”積極的「伝え手」たちによって、うわさがかなりのスピードで駆け巡ったことは推測できる。

Ｑ．２〔うわさの内容〕

Ｑ．１で「直接聞いた」と答えた者の回答をもとに、うわさの内容を見ていこう。

どこで（事件の場所）

事件の起こった場所として具体的に上がってきた地名で一番多かったのは「北越谷」（13件—実数・以下同様)。次いで、「越谷」（11)「春日部」（９)「草加」（８)「川口」（７）などと続く。「出津橋」（Ｂ大学前の元荒川にかかる橋、６)「神明町」（３)「神明橋」（２）などと、越谷市内の地名で、もっと細かく場所を特定化する回答もある。

だれが（加害者）

事件の加害者として上がってきた表現で一番多かったのは「外国人」（「外人」「外国人労働者」を含む）で47件。国名でもっとも多かったのは、「パキスタン人」(34）で、「黒人」(17）がこれに続き、「東南アジア系

……」という表現も10件ある。「バングラディシュ」は3件である。[1)]

だれに（被害者）

被害者は、単に「女性」とするものが圧倒的に多い（60）。次いで「夫婦」（34）、「おばさん」（「中年の主婦」「主婦」「中年の女性」を含む）（14）、「カップル（アベック）」（10）、B大生（8）などが続く。「おばあさん」というのも7件ある。上で「夫婦」にカウントした中にも「老夫婦」（5）「中年夫婦」（6）が含まれているが、今回のデマの特徴の一つは、被害者に中年や老年の女性までが登場することである。一般的に性犯罪の被害者は「若い女性」であることを考えると、このデマの特異性の一つが浮かびあがってくる。「子どもから老人まで（女だったら年に関係なく）」という表現も5件ある。

どのように（状況）

事件がどういう状況の下で起こったかということに関して、具体的な数字を出すのは無意味な程、内容は見事に一定のパターンの中におさまる。状況設定では、「犬の散歩中」というのが目立つ程度である。重要なのは事件の中身で、これはほとんど一つの型に集約できる。夫婦やカップルどちらの場合でも、一緒にいた男性の方が「殴られたり」「縛られたり」「はがい締めにされたり」、いずれにしても自由を奪われた状態で、女性の方が暴行されるという内容のものが圧倒的に多い。

どうなった（結末）

この点でもいくつかのパターン化が見られる。「被害者が事件後（ショックで）自殺したというもの」が圧倒的に多く、「ノイローゼになって入院」という型も少なくない（ノイローゼになったのは男性の方とする変種もある）。またここでは、被害者が「子宮破裂」「子宮破裂で入院」「子宮破裂で死んだ」「内臓破裂」「子宮がぐちゃぐちゃになった」「子宮を取り出された」「石を入れられた」「赤ん坊を生めない体になった」など、サディスティックな内容の回答が含まれているのが特徴である。

考察

うわさや流言（デマ）の研究といえば、その発生から消滅までの伝達経路や、それにともなう内容の変化をあとづける追跡調査が行なわれてきた。[2)]そういったオーソドックスな研究から見れば、今回の調査は変則的かつ間接的なものである。限定された調査対象に対する質問紙法の小規模な調査であるから、極めて不完全なものである。しかし、これだけのものからでも明らかにされるものは少なくない。

調査対象がデマの舞台となった地域にある大学生たちであったことから、当然のことながらデマの「接触率」や「認知率」はかなり高い。しかも、デマの内容については、回答者自身にひきつけたストーリー作りがされていることがうかがえる。被害者に「B大生」が登場したり、事件の発生場所に極めてローカルな「出津橋」が出てきたりするのがその例である。

デマの内容で言うと先に触れたが、サディスティックな内容のものが目立つのが特筆すべき特徴である。この種のものは、「残虐デマ」と呼ばれるもので、戦時の敵軍の行為や大災害の後で起こるデマなどに多く見られる。[3)]いずれも伝え手たちの強い恐怖心と不安を反映している。そして今回のデマの場合でも、それは日本人の強い外国人に対する「怖れ」に根ざしているといえる。「子どもから老人まで見境なく襲う」という内容にも、何をするか分からない不気味な外人というイメージが投影されている。そして、この場合の外国人とは非白人系の人たちを指している。その意味で、今回のデマは関東大震災時の「朝鮮人」についてのデマと同様に、日本人に根強い民族的偏見と差別意識の一端を図らずも露呈してしまったのである。[4)]

調査結果の概要については既に述べた通りだが、ここで改めてこのデマの発生の背景について検討し、デマの内容とデマの展開についても若干の補足をしておくことにしたい。

デマ発生の背景

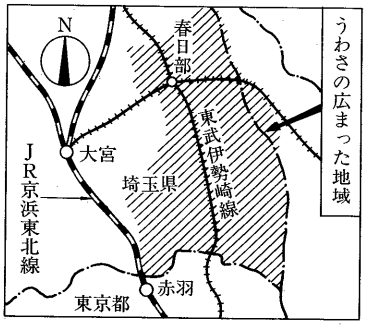
〔地域的特性〕

今回のデマの流布地域の主要部分を占める埼玉県東南部（図－１参照）は、都心への通勤圏であることから昭和30年代半ばから急速に都市化が進んだ地域である。東武伊勢崎沿線の春日部・越谷・草加などの典型的な近郊新興都市を中心に構成されている。この地域は、東京都で言うと足立区の延長線上に位置し、沿線イメージは決して高いとは言えない。環境をトータルとしてみた場合にも、居住環境・住宅地としての条件が良いとは言い難い。そのために、都心からの距離は近い割には、現在でも相対的に家賃は低いレベルに抑えられている。そのことも一つの要因となって、数年前から外国人労働者の激増が話題となっていた。具体的な数字で言うと、外国人登録者数は草加市1451人（総人口204,628人）、越谷市1548人（総人口284,480人）春日部市711人（総人口189,865人、いずれも1990年12月１日現在）などとなっている。もちろんこれは表に現れた数字であり、不法滞在者を含めると実数はこれを大きく上回るだろう。[5)]

実際に、越谷では外国人（主に東南アジア系）の姿を見かけることが多い。特に彼らは駅前にたむろしていたり、集団で行動することが多いので目立ちやすい。Q．２やQ．３の回答で、そのあたりの事情に触れたものも多く、その典型的な記述に次のようなものがある。―「…とにかくこの辺は外国人がたくさん住んでいると思うし、私の下宿（大袋付近）も夜中はたいてい５～６人の外国人男性がグループでうろついているだけに、あまり気分のいいことではない」（女・19・越谷市大袋―回答者の性別・年齢・住んでいる場所、以下同様）、「近くにたくさんの外国人が住んでいるので、夜など出歩くとよく会う。たいてい３～４人で立っていたりして、必ずといっていいほど声をかけてきたりするので、そういうことを考えると、うわさは立つべくしてたったという感じもする」（女・21・北越谷）

この回答にもあるように、女性に気軽に(!?)声をかけるというのも彼らの行動の特徴の一つである。自分自身の体験として彼らからの何らかのアプローチを受けたという事実に触れる回答も少なからずある。――「越谷で外国人に追われて『僕怖いですか？　外国人は怖いですか？どうして逃げるんですか？　僕何もしません』と言われた。私は、『別に怖くはないですよ。でも電車がもうすぐ来るから走らないと間に合わないんです。ごめんなさい。』と言った。」（女・19・東村山）「北越谷の駅で声をかけられたことが２回ほどあるが、ごまかして逃げた」（女・20・柏）「…越谷の駅前で、中東系の男性にナンパされた。」（女・21・南越谷）「…昼間いやらしいことを言われたり、歩いていて突然腕をつかまれたりしたことがあるので、とりあえず警戒してしまう。…」（女・20・越谷市神明町）「…駅の付近にいると外国人がヘラヘラ話しかけてきたりするのを思い出して、信じてしまったような気がする」（女・19・北越谷）「電車内で外国人がよくいるが、終電などで人数が増えてきていやな目つきで見られるのが気になる。」（女・19・伊勢崎市）「…

図１



特に東南アジア系の人は、目を合わせると声をかけてきたりすることがあるので、文化の違いからだというふうに思ったりしますが、それを受け入れることは出来ません。…」（女・20・栃木県）

日本人でも群がっていることはあるだろうし、「ナンパ」する男はいるだろう。それに、最後の回答が言及しているように、“異性に積極的にアプローチする”というのはまさに文化の問題だろう。しかし、それにもかかわらず、彼らの存在と行動について違和感と不快感を感じていた人間がいたということも事実で、これがデマ発生の一つの重要な素地となったことは否定できないだろう。

〔外国人がらみの犯罪・事件の頻発〕

外国人関連の犯罪・事件の増加は社会問題として注目を集めていたが、このデマの流れた時期にも少なからぬ犯罪・事件が起きている。その全部を網羅することは出来ないが、新聞報道されたものの中からいくつかを上げてみても次のようなものがある。[6)]

＊パキスタン人４人逮捕～同国人ら狙い連続強盗の疑い『朝日新聞』1990. 10. 2
＊中古車を無許可売買、輸出容疑～パキスタン人逮捕『朝日新聞』10. 5
＊越谷のバングラディシュ人刺殺事件～仲間とトラブルか　同居の同国人ら姿消す『朝日新聞』（埼玉版）10.11『読売新聞』（埼玉版）にも同様記事
＊外人３人が強盗『毎日新聞』（埼玉版）10.14
＊暗躍する出稼ぎ外国人～蕨署のパキスタン人摘発『読売新聞』（埼玉版）10.17
＊わいせつの留学生逮捕『読売新聞』（埼玉版）11.9
＊外国人が路上強盗　高級時計など奪う～千葉・野田『毎日新聞』11.18
＊越谷のバングラ男性殺し～隣の同国人を逮捕『読売新聞』（埼玉版）11.27　『朝日新聞』にも同様記事
＊パキスタン人元工員逮捕状とり行方追う～草加の死亡ひき逃げ『朝日新聞』（埼玉版）11.28

このように外国人（特に東南アジア系）の凶悪犯罪が頻繁に起こると、全体としては極めて治安のよい日本であるから余計に目立ってしまう。そこで、“外国人＝怖い”というイメージが作られ、それがデマの発生基盤の一つとなったことは十分に考えられる。

デマの内容

デマの内容がどのように歪められていくかについては、オルポートとポストマンの『デマの心理学』において呈示された、「平均化」「強調」「同化」という有名な法則があるが、このデマの場合にもそれは当てはまる（前出「結果」の〔うわさの内容〕を参照）。

それは少し別の言い方をすると、「事実との混同」「事実の断片を取り込んだストーリー作り」という観点からも見ることができる。デマの内容には「伝え手」の知っている事実が、断片的に紛れ込んでいって、結果的には全く「いいかげんな」「とんでもない」話が作り上げられていくということがしばしば起こる。

例えば今回のデマの場合でいうと、女性の襲われた場所として「神明町」（「神明橋」）を上げるものがいくつかあったが、この地名は上の〔事件〕のところで示したように、バングラディシュ人が同国人を刺殺した事件が起こった場所である。“神明町でバングラディシュの殺人事件があった”という事実が、いつのまにか“神明町でバングラディシュ人に女性が襲われた”という話になってしまうのである。同様の例として、デマの内容の一つに“外国人に襲われた被害者の女性が春日部のロビンソンの屋上から飛び下り自殺をした”というのがあったが、確かにデマの広が

る少し前に“春日部のロビンソン（デパート）の屋上から女性が飛び下り自殺をする”という事件は実際に起きてはいるのである。「飛び下り自殺した女性」と「外国人に襲われた被害者の女性」を強引に結びつけてしまうところが、デマのデマたる所以である。“襲われたB大生が自殺した”というものもよく出てきた一つのパターンだが、ここにもまた事実の断片の混入が見られる。確かにこの時期にB大生で死亡した女性はいることはいるのである。

マスコミ報道とデマの鎮静化

このデマはマスコミも取り上げた。例えば『朝日新聞』1990年11月28日の夕刊は、「埼玉と千葉デマに弱った?!～『根も葉もない』と警察」の大見出しで、かなりのスペースを割いた記事を載せた。さらに、11月30日の「天声人語」でも同じ問題を取り上げた。いずれの場合にも、警察の全面否定のコメントを強調し、日本人の東南アジア系の外国人に対する偏見を指摘している。[7]新聞ではそれ以外に「うわさに騒然　県東南部～警察『悪質なデマ』」『読売新聞』（埼玉版）11.29など、他紙の報道もこれに続いた。テレビでもNHKをはじめ民放のニュースやワイドショーでこの話題が取り上げられた。

物不足パニックの際のように、マスコミ報道は必ずしもデマの鎮静化に有効とは限らないが、今回の場合にはかなり強力な火消役となったようである。一般にデマの一生は、発生→成長→成熟→〈対抗〉→鎮静→消滅の図式で表わされるが、今回の場合はこの〈対抗〉が非常にタイミング良く発動され、それなりに有効に機能したと思われる。加えて、日本人は「偏見」の指摘を一般論としてなら素直に受け入れる程度には「成熟」（国際化!?）しているのである。しかし、ホンネのレベルで本当の意味で「差別」や「偏見」意識が克服されなければ、この種のデマはこれからも繰り返されることになるだろう。

もう一つのデマ騒ぎ

と、書いたところ本当に次の「事件」が起きてしまったのである。今回のデマ騒動の舞台となったのは、栃木県の真岡市。1991年の10、11月頃から「外国人に乱暴された」「外国人に襲われた」というデマが市内に広がったという（時期的には、埼玉のケースのちょうど一年後ということになる）。[8]

デマの内容も、「ジョギング中の夫婦が外国人に襲われ、夫の目の前で妻が乱暴された」「公園で散歩中の60才の婦人が、4人組の外国人から暴行を受けた」「家に外国人が押し入り、夫や家族の目の前で主婦を乱暴、悲観した主婦が自殺した」など、埼玉の場合と見事に一致している（先の調査では「家に押し入った」という回答はなかったので、ここが相違点といえば相違点と言える）。

真岡市は栃木県の東南部に位置し、焼き物の町で有名な益子に隣接している。もとは、稲作やいちご作りを主とする純農業地帯であったが、1972年に地域の過疎化対策として工業団地が作られてから急速に変貌した。現在では、金属、自動車部品メーカーなど約60社が進出しており、求人倍率も県内一と求人需要が高い。外国人が急に増え始めたのは1988年からで、前年86人だったのが一挙に215人に増えた（登録者数）。特に真岡の場合はブラジル、ペルーの日系人が多いのが特徴で、1990年6月の入管法の改正（日系人は合法的に働けるようになった）で、その増加に拍車がかかった。1991年11月30日現在の外国人登録者数は、1,555人、実際にはその倍以上の外国人がいると見られている。真岡市の人口は約62,000人だから、この数字で単純に計算すると外国人が市の人口の約5％を占めていることになる。[9]

この急増した外国人という客観的条件と、外国人がらみのいくつかのトラブルがこのデ

マの背景にはありそうだ。例えば、真岡市内には国際電話がかけられる公衆電話が14台あるが、91年4月から8月の間に、延べ22回も壊されたという。現行犯で、犯人を捕まえたケースはないので断定は出来ないが、住民の中には通話料金が割引になる夜11時以降よく利用している外国人によるものと見ている者が少なくない。また、91年5月には市営住宅に住むベトナム難民と地元住民とのもめ事で、警察官が駆けつけた騒ぎがあり、地元住民が市長に事態の改善を求める要望書を出したという「事件」も報告されている。

このような条件が重なって、市民の間に不安感が広がりそれがデマ発生の素地となったと考えられる。一昔（二昔？）前までは、純農村地帯であった当地である。いわゆるムラ的共同体の名残があったことだろう。そうした伝統的な人間関係のネットワークの中に、「よそ者」の突然の大量流入だった。土着の住民は当惑を感ぜざるをえず、そこで引き起こされる摩擦もとりわけ大きいものとなったことは容易に推測できる。[10]

真岡市の場合、デマの対応やその後の展開は前述の埼玉のケースと似ている。真岡署の調べでも「事実無根」、市役所独自の調査でも「そういう事実はない」という結論だった。市では市民の動揺を抑えるために、12月13日「デマに惑わされず、冷静な正しい判断を！」という臨時広報を全戸に配って、デマの鎮静化を図った。[11]

外国人労働者に関する世論

先に、日本人も一般論としては「偏見」の指摘を素直に受け入れるほどには成熟していると書いたが、外国人労働者についての世論調査の結果を見てもそれは確認できる。いくつかの調査に共通して見られる特徴としては、一般論としてなら、日本人は外国人労働者受け入れにかなり寛容な態度を示していることが見て取れるのである。

ここでは、「朝日新聞」「総理府」「読売新聞」の時期を異にする三つの全国調査の結果を見ておくことにする。[12]まず、「朝日」の調査から見ていこう。この調査では、外国人労働者のことを見聞きすることがあるかと尋ねた上で、次のような質問をしている。

◆こうした単純労働を目的とする外国人について、政府は受け入れない政策をとっています。あなたは今後も、受け入れない政策を続けたほうがよいと思いますか。それとも、何らかの条件をつけて、受け入れた方がよいと思いますか。

＊受け入れない政策を続ける	33%
＊条件をつけて受け入れる	56
＊その他・答えない	11

◆仮に、外国人の単純労働者の入国や就職を認める場合、どんな条件をつけたらよいと思いますか。（回答カードから一つ選択）

＊就労期間を制限する	27%
＊働ける企業や期間を制限する	25
＊人数を制限する	22
＊特に条件をつけない	11
＊扶養家族の入国は認めない	5
＊その他・答えない	10

◆あなたは外国人労働者をどんなふうに見ていますか。（回答カードから一つ選択）

＊人手不足を補っている	29%
＊安い労働力を得られる	16
＊受け入れは先進国のつとめだ	14
＊治安・風紀などが乱れる	13
＊嫌な仕事を押しつけている	12
＊日本人の労働条件を引き下げる	6
＊その他・答えない	10

◆仮の話ですが、もし外国人労働者や難民があなたの隣に住むようになったら、あなたはどんな感じを持ちますか。（回答カードから一つ選択）

＊社会になじめるように手助けしたい	47%
＊なるべくつきあいたくない	20

＊外国の文化に触れるよい機会だ　11
＊ほかへ移ってほしい　10
＊その他・答えない　12

総理府の調査の場合は次のような結果になっている。

◆我が国では就職を目的とする入国のうち、専門的な技術、技能や知識を持っている人は認めていますが、単純労働については認めていません。このような政策についてどう考えますか。
＊単純労働者の就職は認めない現在の方針を続ける　14.1％
＊単純労働者であっても一定の条件や制限をつけて就職を認める　56.5
＊特に条件をつけず日本人と同じように就職を認める　14.9
＊その他・わからない　14.4

◆単純労働者の就職を認めるべきでないと考えるのはどうしてですか。（認めないと答えた人のみの複数回答）
＊景気がいい時はともかく、不況のときには日本人の失業が増加するおそれがあるから　52.7％
＊治安が悪化するおそれがあるから　54.0
＊日本人が就きたがらない仕事に外国人を使おうとするなど、外国人に対する歪んだ見方が生じるおそれがあるから　20.6
＊日本人の労働者も含め一般的な労働条件の改善が遅れるおそれがあるから　14.8
＊日本固有の文化が失われるおそれがあるから　6.7
＊地域社会の中でトラブルが多くなるおそれがあるから　38.7
＊その他・わからない　4.5

◆単純労働者の入国を認める場合、どのような条件や制限が必要だと思いますか。（条件つきで認めると答えた人のみの複数回答）
＊期間に制限をつけ、それ以上の滞在は認めない　48.2％
＊本人に限って滞在を認め、家族の呼び寄せは認めない　20.1
＊国や自治体など責任ある機関のみが雇うことができるようにする　23.4
＊職業分野別に受け入れ数を制限し、他分野への移動は認めない　17.9
＊その他・わからない　8.1

「読売」の調査の場合も、ほぼ同じような質問項目から構成されている。

◆あなたは、今後、建設現場や工場、飲食店などで働く外国人労働者を、日本に受け入れるべきだと思いますか、それとも受け入れるべきでないと思いますか。
＊積極的に受け入れべきだ　9.0％
＊ある程度は受け入れるべきだ　63.4
＊できれば受け入れるべきではない　19.7
＊一切受け入れるべきでない　2.4
＊答えない　5.5

◆（単純労働の外国人労働者の受け入れが日本社会に与える影響について）好ましくない影響だと思うものがあれば、いくつでもあげて下さい。
＊日本人の失業者が増える　16.8％
＊日本人の労働条件の改善が遅れる　17.2
＊日本の社会保障制度に支障がでる　14.1
＊治安や風紀が悪化する　44.1
＊地域社会での生活上のトラブルが多くなる　40.7
＊日本の伝統的な文化が失われる　7.3
＊その他　1.1
＊好ましくない影響はない　13.3
＊答えない　7.7

◆（受け入れに条件や制限が必要だと答えた

人＝全体の61.1％　だけに）特に条件や制限が必要だと思う面を、次の中から、いくつでもあげて下さい。

＊働ける期間	51.1％
＊働ける企業や機関	37.1
＊職種別の受け入れ人数	34.7
＊国籍別の受け入れ人数	16.4
＊本人以外の家族の滞在	16.6
＊その他	1.7
＊答えない	4.6

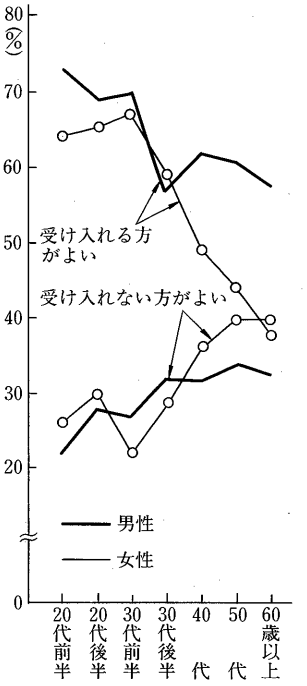
これらの結果から分かるように、外国人労働者についての世論は、「条件付き受け入れ」や消極的支持を含めた「入国容認」派が大勢を占めていることがわかる。それも時間の経過に従って増加する傾向がうかがわれ、後の二つの調査では、いずれも70％を超えている。７割という数字は決して小さいものとは言えない。

このように、一般論のレベルで見るかぎり日本人は外国人労働者に対して「拒否的」でも「排他的」でもないのである。ただ問題なのは、これがどの程度までいわゆる本音の意見と一致しているかということである。一般論・総論のレベルでは建前の「優等生的」回答が前面に出るということはよくあることである。例えば、「朝日」の調査の「…もし外国人労働者や難民があなたの隣に住むようになったら…」という問いに対する「社会になじめるよう手助けしたい」＝47％、という結果にそのようなものを感じる。なぜなら、一方で経済難民の受け入れに関しては、同じ調査で「受け入れたほうがよい」＝32％、「受け入れないほうがよい」＝52％という結果も出ているからである。それに、前の問いはあくまでも仮定の話なのである。

一般論や他人の話である時は、寛容で理解ある態度を示しながら、いざ事が自分自身に直接関わることになると態度が急変するというのは、差別をめぐる問題ではよく見られるパターンである。ましてや、ウチとソト・ミウチとヨソモノを峻別するというのが、日本人の伝統的な集団意識の大きな特徴である。日本人の集団が、異質の成員に対し強い抵抗を示す事はよく知られている。しかもそれは一種の「身体感覚」のように、われわれにすっかり染みついてしまっている習性のようなものなのだ。これを変えていく事は決して容易な事ではない。

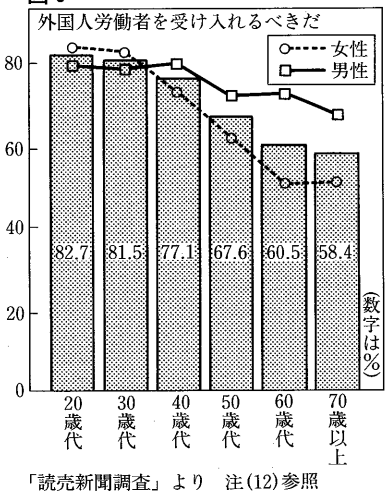
しかし、変化のきざしは十分ある。図－２および図－３からもはっきりと分かるように、外国人労働者に対する意識には、大きな世代差が見られる。若い層ほど「受け入れ派」や「容認派」が多いのである。これは実に明確な傾向として出ている。実際、身近で見聞きする個人的体験も含めて、最近では「外国人」を特別意識せずに、ごく自然に彼らに対応できる若者たちが増えている。ガイジンと聞いただけで、拒否反応を起こしたり、尻込みしてしまう旧人類とは大違いである。

図２
外国人単純労働者をどうするか



「朝日新聞調査」より　注(12)参照

図 3



「読売新聞調査」より　注(12)参照

一定の年齢以上の旧世代は外国人を目の前にすると、何となく怖じ気づいてしまうのである。「身体感覚」といったのはまさにこういう事である。しかし、若い世代はそこが違う。外国人に対した場合でも、特別身構える事もなく一人の人間として自然に振る舞えるのである。もちろんその場合には、外国語を自由にあやつれるということも重要な前提条件になっている。

今やモノの自由化、カネの自由化に続いてヒトの自由化は不可避の流れである。人の交流抜きの国際化などありえないからだ。しかし、大規模な人間の流入を伴なわずに、物や思想だけを輸入してきたというのが日本文化の伝統である。大袈裟に言えば、日本人は今歴史上かつて経験した事のない新しい体験を余儀なくされていると言えなくもない。大きな抵抗や衝撃があるのは、ある意味で当然なのである。ただ、それが避けられない大きな流れだとするなら、偉大な「知恵」を持ってそれに対処していくしかないだろう。一つのデマの話題から、話はとんでもない大きな話に広がっていってしまったが、デマというものはまさに時代の社会心理の反映であり、さらには時代そのものの象徴となることもあるのだ。

注

(1) 学生たちの話を聞くと「黒人」というのは、必ずしもアフロ・アメリカンという意味で使っているとは限らないようだ。肌が黒い（褐色）ということで、東南アジア系の外国人もこの中に含まれているようである。また、彼らの中には「パキスタン人」「バングラディシュ人」を「パキちゃん」「グラちゃん」という略称で呼ぶ者もいた。もちろん冗談めかしてではあるが、これも「蔑称」であろう。

(2) 今回のデマの場合にも、「大学生ルート」「パート仲間ルート」「地域住民ルート」の三つのルートを中心に、伝達経路の追跡調査を試みたものがある。宮澤かすみ・岡本かおり・田口博子「外国人労働者による婦女暴行の流言に関する研究(1)」日本心理学会第55回大会発表（1991年11月）参照。この発表者たちを中心とする「国際化に向ける地域ネットワーク研究会」からは、資料の提供の協力を得た。

(3) 大地震の後のデマで、「被災者の死体から指輪を指ごと切り取って盗む者がいた」などというのがその典型である。

(4) 日本社会心理学会第32回大会（1991年10月）の筆者の発表に対し、木下冨雄教授（京都大学）から次のような御指摘を頂いた。――「このようなデマは、ある地域に異質なものが入り込んできた時に、それに警戒を発するという形でどこででも普遍的に見られる現象である。したがって、偏見とか差別とかいうこととは違う観点からとらえることができるのではないか。むしろ、『動物園から猛獣が逃げ出した』『刑務所から凶悪犯が逃げ出した』という話で、特定の地域がパニックに陥るようなケースとの類似性を見ることができる。」

(5) 1992年２月１日現在の最新データでは、草加市1727人（総人口208445人）、越谷市1906人（総人口288086人）、春日部市976人（総人口192687人）といずれもさらに増加している。

(6) 警察庁のデータでは、1991年の外国人（永住者、米軍人を除く）の刑法犯検挙数は、総数で約6000件、4000人を超えるという（これまでの最高は、90年の4064件、88年の3020人だった）。ただ、母数となる外国人の実数がつかめないので、犯罪率の高さを直ちに確定することができない。「外国人労働者と共生～問われる日本の生き方」『朝日新聞』1992.2.17朝刊、参照。

(7) 「埼玉県のデマ騒動、渦中の外国人『迷惑で

す』」〈ニュース三面鏡〉『朝日新聞』1990.12.4朝刊、「うわさのルート検証『女性が外国人に襲われた』」1990.12.25朝刊（埼玉版）などの続報がある。

(8) 以下の記述は、「『市民に乱暴』デマ騒ぎ」『読売新聞』1991.12.7夕刊、「『外国人が市民に乱暴』デマ　背景に社会変化への不安」〈解説〉『読売新聞』1991.12.10朝刊、「"国際交流都市"真岡で発生した外国人暴行デマの一部始終」『週刊朝日』1991年12月27日号の各記事と、筆者自身が市役所広報課に問い合わせて聞いた話による。

(9) 1992.1.31現在では、さらに1633人に増加している（そのうちブラジル人が848人、ペルー人が504人で、この二か国が大勢を占めている）。

(10) 注(8)に示した『読売新聞』の二番目の記事の中で、藤竹暁教授（学習院大学）は、「農村に工場が進出するなど町が急速に変化すると、旧来からの住民は既存の共同体が壊されることへの不安感を抱くようになる。漠然とした不安の原因を、外国人という理解しにくい存在に押しつけることで、危機意識の対象が絞り込める。」とコメントし、外国人が日本人の不安心理のスケープゴートになっていると解釈している。また同時に、関東大震災の朝鮮人虐殺を招いたデマと今回のデマの"構造の類似性"を指摘している。

(11) これによって、真岡市では一応の鎮静化を見たという。ただ、近くの茂木町でその後、同種のデマが話題になっているという（真岡市役所広報課の話、1992年2月）。

(12) 各調査の概要は以下の通りである。

①朝日新聞世論調査「外国人労働者」
調査日：1989.10.18-19
対象者：全国の有権者　3000人
実施方法：個別面接調査
有効回答率：79％

②総理府「外国人労働者問題に関する世論調査」
調査日：1990.11.22-12.2
対象者：全国の20歳以上の男女　5000人
実施方法：個別面接聴取調査
有効回収数（率）：3681人（73.6％）

③読売新聞社会世論調査
調査日：1991.5.25-26
対象者：全国の有権者　3000人
実施方法：個別面接聴取調査
有効回収数（率）：2179人（73％）

『朝日新聞』1989.11.6朝刊、『読売新聞』1991.6.12夕刊、『月刊　世論調査』（総理府広報室）1991年6月号参照。

〈付記〉データ収集の際に、越谷、草加、春日部、真岡の各市役所広報課の協力を得た。記して感謝したい。

主要参考文献

G. W. Alloprt & L. J. Postman, *The Psychology of Rumor.* Holt, Rinehart & Winston, 1947. 南博（訳）『デマの心理学』岩波書店、1952

廣井脩『うわさと誤報の社会心理』日本放送出版協会、1988

木下冨雄「流言」池内一（編）『講座社会心理学3　集合現象』東京大学出版会、1977

南　博『社会不安』PHP研究所、1974

南　博＋社会心理研究所『くちコミュニケーション』誠信書房、1976

三隅譲二「都市伝説：流言としての理論的一考察」『社会学評論』165（第42巻第1号）日本社会学会、1991

E. Morin, *La Rumeur D'Orléans.* Éditions du Seuil, 1969. 杉山光信（訳）『オルレアンのうわさ』みすず書房、1973

T. Shibutani, *Improvised News: A Sociological Study of Rumor.* Bobbs-Merrill, 1966、廣井脩ほか（訳）『流言と社会』東京創元社、1980